

# 教科でキャリア教育

甲府昭和高校（山梨県立）

第51回  
英語



今号の先生

英語  
田中知聡先生

大学院修了後、中学校教員を経て、高校の教員に。生徒が思考しながら読む・聞くことを「発問」で促す授業や、生徒の「自己表現活動」を取り入れた授業などを推進。共著に「主体的・対話的で深い学びを実現する! 英語授業の発問づくり」(明治図書出版)、「英語教師のための文法指導デザイン」(大修館書店)などがある。

## 自分はどう思うか、社会にとってはどうか。 その思考と対話を、英語で楽しめる環境に

英語の教科書は  
社会に開かれた窓でもある

山梨県立甲府昭和高校の英語コミュニケーションⅠの授業。教壇から田中知聡先生が英語で問いかけると、生徒たちがしばし沈黙することが何度かあった。

英語が聞き取れなくて、という生徒もいたかもしれないが、それだけではない。生徒たちはこれまでに、教科書を「思考しながら読む・聞く」ことを、**図1**や**図2**のような手法でくり返してきた。田中先生の間には、その経験を活かして頭を回転させないと答えられないものが多く、つまりは思考するために押し黙ったのだ。

学習中のトピックに関連して「これは良いと思う?」「なぜそう思うの?」と問われたけれど、自分はどう思うのだろう。自分はどうだと、「誰にとっては」を考えたらどうか。あるいは「どいつの場面か」で判断が変わることはないか。

考えをめぐらしたあとは、隣り合う生徒同士で、**図3**のような英語によるやり取りにも挑戦し、他者の視点にふれることでさらに考えを広げていった。

「英語の教科書には、いろいろなトピックが掲載されています。生き方や文化、自然科学、環境問題など。その教科書を使って学ぶ英語の授業は、生徒がこの社会で起きていることについて考えを深める絶好のチャンスだと思っています」

教科書を基に、生徒が自分のことから、他者や社会のことにまで目を向けていく。それが田中先生の英語の授業だ。

目的の達成を目指して  
英語4技能を使って考える

教科書のトピックを読み(聞き)、考えたことを英語で書く(話す)という学習をするにあたり、生徒たちの実生活に結びつくような「英語を使う目的・場面・状況」を設定しているのも、授業の特徴だ。

例えば、ポイ捨て対策のアイデアにふれたトピックの学習では、地元の富士山のゴミ問題を最初に確認。「国内外から人が訪れる富士山の五合目であなたが働くなから、ゴミ問題にどう対応する? 英語のプレゼンを聞いて考え、発信しよう」という設定の下、教科書のトピックの音声版のリスニングに生徒たちが挑んだ。

ポイ捨て対策として英語で語られたのは、次の三つの独創的な「ゴミ箱」だ。

①ゴミを入れると、底なしのように落下音が何秒も続き、最後にゴーンと音がする。ユーモアで人を引き寄せる「ゴミ箱」。

②「ゴミ箱」に二つの選択肢が示されていて、タバコの吸い殻で投票できる、意見を表明したくなる人間の欲求を利用したもの。

③カメラと車輪を備えたロボット型「ゴミ箱」で、「ゴミ」を見つけると止まって待つので、人が拾って箱に入れてあげたくなる、他者を助きたい本能を利用したもの。

生徒たちはこれらの内容を、パートナーごとに、田中先生の発問や、ワークシートの発問を起点に「思考しながら英語を聞く」ことで、段階的に把握していった。1回目のリスニングで全体を大まかに捉え、2回目にはキーワードを耳でキャッチして詳細ま

図1 「思考しながら読む・聞く」のレベルを3段階で深める



図2 さまざまな思考の仕方を学ぶ

理解するために読む・聞く 表現するために話す・書く ときに使える思考	考えを広げる 社会に目を向ける ときに使える思考
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 時系列で捉える</li> <li>○ 原因と結果を捉える</li> <li>○ 比較する・対照する</li> <li>○ 事実と意見を分ける</li> <li>○ 意見と理由を考える</li> <li>○ 具体例を考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自己と結びつける ・「自分はどう思うか」を考える</li> <li>○ 他者や社会に目を向ける ・「誰にとっては」を考える (異年齢、外国人など)</li> <li>・「どういう場面か」を考える (場所や状況による変化)</li> <li>・他者とやり取りし、 異なる視点を得てまた考える</li> </ul>

これらの思考を生徒は一度に学ぶのではなく、教科書の内容に応じて、田中先生が「事実と意見を分けよう」と、有効な思考の手法をレクチャー。段階を踏みながら、さまざまな思考の仕方を身につけていく。

図3 やり取りで考えを深めるプロセスを学ぶ



生徒同士の英語でのやり取り。ワークシートの発問も活用して自分なりに考えてきたことを、隣同士で共有し、視野を広げる。

でつかむ、といった具合に。最後に田中先生が改めて英語で問いかけた。「富士山のポイ捨てを減らすのに最も効果的な手法はどれだと思っ？」と。生徒は各自で考えをまとめ、隣同士で議論もしたうえで、自分の意見を理由付きで手元のパソコンに英語で入力した。書き込みはオンラインで即時共有され、先生やほかの生徒がコメントや「いいね」で反応することもできる仕組みだ。

ある生徒は、音のする「ゴミ箱がいい」と考えた。どの国の人でも言語の違いを越えて楽しめるからだ。別の生徒も音のする「ゴミ箱」を選んだ。でも選出理由は違い、言葉がおぼつかない幼い子にも響くことに着目してだった。ある生徒は、投票できる「ゴミ箱」を推した。国内外から多様な人が訪れる富士山なら面白い投票結果になりそうだから、と。自分の好みではなく、「誰に

とっては「どんな場面か」と広い視野で、社会にも目を向けて考えたことがうかがえる内容だ。生徒たちはその多様な意見にふれることや、自分の意見に反応がつくことも楽しんでいた。

書き込む前に「違う案を考えてもいいですか」と切り出した生徒もいた。田中先生は歓迎し、新しい「ゴミ箱」をクリエイティブなアイデアを全体にも共有した。

「実は最初は『四つ目の案を考えてもいいよ』と私から伝えようとも思っていたんですけど、でもそうすると、私の期待を生徒が察知してしんどくなりそう、言い出してくれるのを信じて待っていました」

**身近なことの質問からも社会に目を向けていく**

この先の授業では、生徒が質問する側になり、生徒から出てきた問いを中心に考

えていく活動も予定している。

具体的には、生徒にとって身近なこと、例えばコンビニエンスストアや音楽について、まずはA・L・Tや同級生に聞きたいことを自由に考える。次にそのテーマで「誰にとつては良いことか」「すべきだと思っか」という価値観や判断を問う質問も考える。「コンビニが遅くまで開いているのは良いと思う?」などと。身近なことについて質問を考え、英語でやり取りするなかで、社会のあり方にまで自然に目が向くようにした取組だ。

「小・中学校を経てきた高校生は、成長の過程からしても、多くのことを吸収できる時期にいます。自分のことから、他者のこと、地域社会のこと、広く世界で起きていることまで目を向けて、その社会で自分はどのようかうに人生を歩みたいかも考えてほしいと思っています」



対話によって  
思考を深め  
共創にも挑む

国語  
千野満広先生

田中先生とは「対話」が重要だね、という話をよくしています。対話のために「頭の中にある概念を言語化」すると、自分の考えが明確化されます。対話のなかで「他者の考えを聞く」と、新たな気づきがあり、さらに自分の考えが深まります。だからこそ生徒には、対話が得意にならなくてもいいので、その経験値を増やしてほしい、と思っているんです。この先も他者とのコミュニケーションを大事にし、そのなかで思考力を養っていくために。

田中先生はそうした対話を、ご自身も生徒と普段からよくされています。授業だけでなく、学校生活全般で、生徒に話しかけ、相手のことを知ろうとしているのです。いつも見ていると感心します。

私も国語の授業では、毎時間座席を変え、生徒同士が対話する——いわばクラス全員と対話する機会を作っています。各生徒の意見をICTで共有し、皆で新しい考えを共創することにも挑んでいます。

授業ができるまで

大学院で培った知見や  
同僚と共創したものを基に

英語が好きで、大学は外国語学部に進んだ田中先生は、教職課程を取りはしたものの、当初は一般企業への就職を考えていたという。けれども、教育実習に行ったのを機に、教員になることを決心する。

「人間関係や学習の悩み、家庭の問題など、さまざまな課題を抱える生徒一人ひとりに、先生たちはこんなにも考えながら教育活動をされていたんだ」と感動したんです。いつもすぐに手を差し伸べるのではなく、生徒の成長を待たたりとか」

先生ってすごい、と思ったからこそ、その先輩たちと自分との力の差も感じた。教育学と、英語の教育法を今一度しっかり

学びたいと考え、大学院に進学。そこでTask-based Language Teaching(目的達成のために英語を使うなかで習得を促す教授法)という考え方を学び、英語の授業実践の基礎を築くことができた。

大学院修了後、兵庫県で中学校の教員に。その学校では、生徒や保護者、地域の人との関わりを担任一人に任せず、「皆で協力する体制ができていた」という。

結婚して山梨県に移ったのを機に、採用選考を受け直し、高校の教員になった。

初任校では、高校での実践はまだない田中先生に対して、同僚の英語の先生たちが、「中学校での実践を関心をもって聞いてくれて、私の得意分野を引き出してくれた」そう。嬉しくて、田中先生もほかの先生のやり方を積極的に学んだ。

2校の経験を通して、田中先生は「教員同士で協力しあって授業をつくる」ことを目指すようになった。現任校でも、各学

年の学習の到達目標をまとめたCAN・Dオリストを同僚と一緒に作成し、そこに向かうための手法についても各教員の創意工夫をシェアしているという。

英語のやり取りにおける  
生徒の自己表現に着目して

高校教員として2校目で赴いたのが工業高校。3校目は総合学科高校で、4校目が、大半の生徒が大学進学を目指す現任校だ。学校ごとに生徒のタイプは違い、学習の進め方も変わったが、どこにおいても田中先生が意識してきたことがある。

「英語を学ぶ目的」を具体的に考え、伝えることだ。例えば工業高校では、将来、外国人の技術者とも協力しあえるように」という前提の下で授業を組み立てた。

二つ目は、教科書のトピックを「教材」という概念を一度取り払い、この社会の話題としてまず自分が面白がることだ。その

うえで面白かった部分を生徒と共有するにはどうすればいいかを思索した。

三つ目は、「答えが合っていたことを褒める」というよりも、「生徒が英語を使って自己表現したことを受けとめる」ことを大事にしてきたことだ。生徒が考えて記述したこと、発言したことに、素直に感心したり気づきをもたらしたりして。

「授業で生徒が英語を使って表現したこと」のなかには、「普段の日本語のやり取りでは言わないことを、自分で考えて表に出したものが」とあると思っんです。例えば、「What do you like to do in your free time?」という問いに、ある生徒が、「I like reading books」と書いたとします。ありふれた一文に見えますが、実はその生徒の人生に本がすごく影響を与えてきたからこそ、つづられた一文かもしれない。そこで「cause」

でさらに言葉をつむぐよう促せば、奥にある思いまで自然に引き出され、生徒自身の考えも深まっていくと思っのです」



生徒の意見の共有には、オンライン掲示板アプリPadletを活用。書き込みにも他の生徒やALTが反応も返していく。

ダウンロード可

学年	英語4技能について「何ができるようになる」ことを目指すのか、具体的にまとめている。
第1学年	...
第2学年	...
第3学年	...

同僚の先生と作成したCAN-Dオリスト。第1学年、第2学年、第3学年の時に、英語4技能について「何ができるようになる」ことを目指すのか、具体的にまとめている。

甲府昭和高校(山梨・県立)



School Data

創立1984年/普通科  
生徒数684人(男子295人、女子389人)  
進路状況(2024年3月卒業)  
大学177人、短大14人、専門学校23人、就職2人、その他8人

Outline

校訓は「自主創造」。生徒に必要な資質・能力として、主体性・協働性・思考力・判断力・表現力・自己評価力を「甲府昭和高校Can-doリスト」にまとめ共有、育成に取り組む。「学習と部活動に真剣に向き合える」という学校像も掲げる。

## 生徒はこう変わる

### 互いの考えを伝え合うなかで 自分や相手への理解を深める

目的達成のために英語4技能を使って考えることをしてきた生徒たちは、春先は隣同士で英語でやり取りしてもすぐ途切れていたのに、秋には対話時間終了後も話が止まらないほどになった。そんな姿を見ると、田中先生は「この子たちはすごいな、大好きだな」と思うという。

「みんな優しいんですよ、相手に対して。発言にうんうんとうなずいたり、yesと返したり。受けとめてもらえた生徒のほうは嬉しいですね。私は、授業を通して「一人ひとりのことをもっと聞きたい」と思っているんです。教科書のトピックにふれて、あなたは何を思い、何を考え、どんなことを

に興味をもちましたかと。英語を使って皆と一緒に考えるなかで『これが好き』とか『こういう感じで生きていきたい』とか、人生のエネルギー源となるものを見つけたいと思っています」

もちろん、好きなことや、やりたいことが見えてきても、世の中には自分の思い通りにはいかないことがたくさんある。でも、その状況とどう向き合うかも、周囲とまた対話して考えてほしいそうだ。

「この先の社会では、外国の人との関わりもより増えるはず。世界にはいろいろな考えをもつ人がいることを肌で感じたときに、偏見や差別を抱くのではなく、相手に質問したり提案したりして、共生するにはどうすればいいかを一緒に考えられる人になってほしいのです」

ICTの進歩で英語の自動翻訳も広まった今、「これからの英語教育に求められることは何だろうか？」ということ、田中

先生は改めて考えるようになった。

「技術がどんなに発達しても変わらないのは、『相手がいる』ということ。相手のことを理解しようとし、自分のことも適切に伝えようと、互いを認め合いながらつながっていく。そのために『英語を使う』ということを、皆で楽しめるような授業を行ってほしいと思っています」

## 世界や社会のことを 皆で考えるのが楽しくなった

— 田中先生の授業の特徴を教えてください。

**三枝さん** 教科書を基に、世界や社会の問題を、先生も一緒になって皆で楽しく考えていく授業です。

**金井塚さん** コミュニケーションを取りながら学ぶというか。先生とも生徒同士でもよく話します。

**田中さん** ペアでのやり取りでは、友達の意見が面白いときがあって、それがいいと思います。

**佐原さん** 私たちのオンラインの書き込みにも先生がいっぱい反応してくれるので、やる気が出ます。

— 授業のなかで、こんなことを学べたな、将来に役立ちそうだな、と思ったことはありますか？

**佐原さん** 「話を読み解く力」と「英語力」が一緒にいる感じがします。英語の教科書を読むことや、英会話を聞くことが、今では面白いです。

**三枝さん** 授業で「与えられた話題について自分で考える」ことをしているので、この先も論文などを読んで意見を述べるときに役立つと思います。

**田中さん** みんなで考えを言い合うなかで、この子はそう思っていたんだ、と気づくことが多いので、「想像力」の幅が広がった、と感じています。

**金井塚さん** 「人に聞くことの大切さ」を教わったように思います。意見を聞いて、いろいろな視点にふれることで、自分の考えを深められるので。



左より、1年生の金井塚勇翔さん、佐原叶笑さん、三枝理子さん、田中絆翔さん



生徒の意見を聞く田中先生。生徒からは「先生が楽しそうなので、自分も楽しく勉強しようと思った」との声が。

## 授業作りのポイント



- ・教科書のさまざまなトピックについて、何が書かれていて自分はどう思ったか、皆とやり取りしながら考えることで、自己や他者のこと、広く社会で起きていることに目を向けてほしいと思っています。
- ・授業の経験を糧に、英語で意見を伝え合い、相互理解や課題解決ができる人になってほしいです。

### Point.1 /

#### 教科書に向き合う 目的や場面を設定

トピックごとに読む(聞く)目的や場面を設定。例えば気候変動の投稿文にふれるトピックでは「世界環境デーのWebサイトの投稿を読み、自分の意見を投稿しよう」という設定の下、readingとwritingを行った。

### Point.2 /

#### 発問によって 思考の深化を促す

教科書を読む・聞くときに「全体をとらえる」ための発問、「要点を押さえる」ための発問、「自身がどう思ったかを考える」ための発問などを、順を追ってすることで、生徒が一步步思考を深めていくように促している。

### Point.3 /

#### 社会に目を向ける 思考の仕方を伝授

さまざまな話題について「～は良いか」「～すべいか」という質問を、教員が投げかけたり、生徒自身に考えてもらい、どんな社会がいかを自然に考えるように後押し。「誰にとっては」と他者目線で考える重要さも伝えていく。

### Point.4 /

#### 一人ひとりが表現し みんなで受けとめる

教科書のトピックにふれて何を思ったか、生徒が自己表現する機会を重視。その表現に対して口頭やオンラインで、ほかの生徒・教員・ALTが反応を返す時間も大切に、やり取りのなかで思考が深まるように促している。